市民自治こがねい広場

散歩だより

NO.103　2020年6月13日発行
編集・発行／市民自治こがねい
〒184-0012 小金井市中町1-2-47 佐藤気付
TEL：090-6014-3566　https://www.sijiko.com/

コロナ後の世界を考える
「変わる」のはなに?

新型コロナウイルス感染症によって半年前には想像できなかったことが起きています。

時差通勤や自宅にこもる日々、営業がなりたたず、職を失い、市民活動も停滞し、人との距離を物理的に離す毎日は、精神的にもはかりしれない影響となった…2020年の春でした。

「元に戻すべきではない」カクゴを

世界規模で経済活動が停滞し、その回復はリーマンショックの「失われた7年」を超えると予想されています。でも、むしろ、「元に戻すべきではない」のではないでしょうか。

私たちは散歩だより101号で地球温暖化を特集しました。イケイケどんどんでCO2をまき散らすV字回復なんてとんでもないことです。そもそも新型コロナウイルスは、環境破壊に起因する新興感染症のひとつです。いまは、気候危機とコロナ危機を招いてきた失敗を方向転換するチャンスなのかもしれません。

緊急事態宣言が解除され「新しい生活様式」がうたわれていますが、大事なのは、どっちを向いて、どんな「新しい世界」をつくっていくのか、覚悟を決めることです。

新しい世界にむかうコンパス

新型コロナウイルスは、この社会の課題を一気にあぶり出しました。

最も被害を受けたのは高齢者、障がい者をはじめとした社会的弱者。そして行革や合理化の名のもとで削減され軽視されてきた保健や医療、ライフラインを支えるエッセンシャルワークの大切さも痛感しました。働き方、暮らし方、地域のつながり、国のカタチなどなどの大胆な見直しが求められています。

突然の閉塞感の日々の中で経験したことや考えたことをコンパスにして、新しい世界を描き、進んでいきましょう。

散歩だよりの編集会議はウエブで行いました。そこで、コロナ後のそれぞれのキーワードを書いてみました。

地元ならではの取組みを紹介します

お互いさま　みんなで助け合おう

学校は一斉休校。飲食店は営業自粛。地元商店を支援しようと、アプリやサイト、新聞折込、掲示などが相次いで動き出した。

小金井お弁当プロジェクト／小金井の飲食店をみんなで守ろうプロジェクト／たべて応援ご近所グルメ／コガネイーツMAP／小金井子育て・子育ち支援サイト「のびのびーの!」小金井テイクアウト特集

また、こんなことも…

みんなdeマスク　手づくりマスクを集めて必要な人に届ける活動。「だれでも食堂」を主催してきた「みんなdeごはん」は、「自粛」で休業、でも、何かできないかと、この活動を始めた。

マスクバンクプロジェクト　小金井市商工会青年部のよびかけ。市民からマスクを寄付してもらい、必要としている業態に配布。

小金井フードドライブ支援　小金井青年会議所のよびかけ。余った食材を寄付してもらい、バイトなどが無くなり食糧支援が必要な学生に配布。

そして、新しい共助の仕組み、顔が見える関係を地域で築く取組み**本町互助会**がスタート。

自分たちでもできることを一歩でもの姿勢。大事にしていきたいです。

いま読みたい本

イタリアの小説家パオロ・ジョルダーノの『コロナの時代の僕ら』。2020年春、新型コロナ非常事態下のイタリアで隔離状態において綴られたエッセイ集。あとがき「コロナウイルスが過ぎたあとも、僕が忘れたくないもの」もおすすめ。

編集後記

緊急事態宣言が解かれたら、やはり発表感染者数は増加。東京アラートなるものが発令されました。集まれず、編集会議はZoomで。音声や画像の微妙なタイムラグや、自分を見ている自分がいることにちょっと疲れたりもするけれど、どこかお互いが近い感じもして、結構突っ込んだ議論ができたのは収穫でした。オフライン飲み会とかも面白そうですが、やっぱり飲みは対面がいいかな。(YS)

「市民自治こがねい」とは

この小金井が、ひとりひとりの人権が尊重され
だれもが生き生き暮らし続けられる町であってほしい、
この小金井を自治が息づく町にしたい、
そのために市民自らが発信し、行動し、
行政のあり方を変え、町づくりを進めていこう。
―そんな共通の思いをもつ市民たちのあつまりです。

会員を募集しています & カンパ大歓迎!

・会費 1口＝3000円／年
・賛助会費 1口＝1万円／年
・ニュースカンパ 1口＝1000円／年
郵便振替 00130-6-352041
市民自治こがねい

市民自治こがねい
http://www.sijiko.com/

コロナ禍の日々、思うこと

仕事を絶たれたイベント業

私はコロナの影響で大打撃を受けたフリーのサウンドエンジニアです。3月上旬に、国は全く保障のないまま名指しでライブハウスの営業やイベントを止めました。あっという間に仕事は無くなり、収入がゼロになりました。テレワークや、在宅という言葉が飛び交う中、現場に行かないとお金がもらえない私達は何とかイベントが復活することを願う毎日です。しかし、再開の目処は立たず、国の保障の遅さに怒りと焦りの日々を過ごしています。

唯一の救いは、毎日見せてくれる子どもの笑顔です。休校で生活費も増え、苦しい状況ではありますが何とか！子どもの為にも1日も早く終息し、通常の生活の中でイベントが楽しめるようになることを切に願います。

Koanoki ／東町

差別や優生思想が闊歩しない社会を

難病を抱えた障がい者の立場からの発言です。生活、身体介助のヘルパーさんたち、通所デイケア、訪問リハビリのPTさん、訪問医療のサービスを受けていますが、緊急事態宣言後もサービスの変更なく過ごしています。私自身、人の手を借りないと生活破綻してしまうという状況にいるため、どのサービスも欠かせないのです。この生活を継続するために、関係してくれているすべての人たちが注意に注意を重ねる努力をしています。その努力を日々感じながら生きています。デイケアに行く5分間の車いす走行以外は、私は家に閉じこもっています。

ただ、ひと度感染してしまったときに、即入院をさせてもらえるのかという不安、そして医療崩壊が起きたらトリアージ（治療の優先順位の判断）の対象者になるのではないかという恐怖を想像してしまいます。差別や優生思想が闊歩しない社会を切望し、それを訴えたいです。

イトー・ターリ／本町

感染を疑いながらの「在宅勤務」

本当に感染していたのかどうか、今でもわかりません。咳と息苦しさと37℃を越えない程度の発熱に見舞われました。「日常」の中で「非日常」をやりくりする毎日でした。まず考えたことはとにかく自分にとって大切な人達にあわないようにすることでした。すぐには職場に言えませんでした。

3/25に都知事が週末の外出自粛を要請したことで急遽、短期の在宅勤務が導入され、ようやく上長に打ち明け自分の在宅勤務の引き延ばしに成功しました。保健所等に相談するという選択肢はありませんでした。体温が37.5℃を越えなかったから。葛根湯はじめ市販薬を買い込みしのいだけれど、不安がなかったかと言えば嘘でしょう。ところで、「在宅勤務」は「新しい日常」になるのだろうか。

小山剛／東町

ＧＷ明けの通勤風景。６割減くらい？

対応は現場任せ 責任も現場?

「自立援助ホーム」という福祉施設の常務理事をしている。ここでは15歳から20歳までの、家庭にいられぬ20人弱の若者が独立を目指し民家で暮らしている。そこに14人の職員が交代で泊まっている。コロナ騒ぎの中、救急車で子どもが深夜運ばれたり、私自身が発熱しコロナを疑ったり、色々なことが起こった。職員と濃厚接触している私が感染すると、職員数が少ないので施設運営が出来なくなる。かなり慌てた。

笑い話もある。2月、厚労省に対応について問い合わせた。「直接の管轄の区に聞いてください」。区に聞くと「都に聞いてください」。都に聞くと「そんな問い誰も答えられないでしょう」。「ではこちらの判断で対応して構わないのですね？」。「そんなこと私が責任をもって答えられますか。しかし感染者が出たら報告だけは上げてください！」。結局対応は現場任せ、責任も現場が持たされるのだ。

コロナの時代、社会的最弱者の若者たちが忘れらねぬことを願う。

北 彰／桜町

迷いながらの営業してます

3月に入り、予約のキャンセルが入りだした頃は、大げさなのでは？インフルエンザみたいなものでしょ？と思っていました。あっという間でしたね。これからどうするか、すぐに判断しなくてはならなくなりました。

みえないウィルス。自分が感染してしまうかもしれない。お客さんに感染させるかもしれない。営業続けるのが、自分のエゴだけなのでは？と悩みつつ、テイクアウト営業続けています。

ウィルスなんか関係なく、毎週届く野菜は、ぴっかぴかで美味しく、この野菜でおいしいごはん作りたい。その思いだけでした。お客さんに、お店あけてくれていてありがとう。という言葉をいただき、ほっとできる一食を届けるために、やっていていいのだ。と今は思っています。

これからは、ウィルスと共存していく生活になるかと思います。飲食店として、どういう営業形態にするべきなのか、考えていこうと思っています。

にしまきごはん店主／中町

がんばる飲食店、それを応援する動きが。

学生は困っています。でも必ず変えてみせます。

声を上げている学生は疲弊しています。声を上げられない学生は本当に追い込まれるところまで追い込まれています。だれが学生を学べないようにしているのか。

このままではお金がないから学べない学生とお金がないから学べない学生を出さないために、この社会と闘い、時間と気力を取られて学べない学生を永遠と出してしまいます。

どうかお願いです。

もう少し、いや、もっともっともっともっとましな社会にするために学ばせてください。

自分たちのような大人を再生産させて、なんで自分たちだけ笑っていられるのですか。

学生は困っています。でも必ず変えてみせます。

自分たちのような学びたいのに学べない学生に、これからの子どもたちになってほしくないから。

堂々と自由に自分らしく学べる社会をすべての人に保障したいから。

そのためにも闘い続けます。

奥田木の実（東京学芸大学生）／貫井南町

気が張る毎日

昨年、里子を次女として迎えました。次女はダウン症で心臓に疾患があり、喘息もち。ただの風邪で気管支炎や肺炎になり、入退院を繰り返しています。

今年3月、咳がひどくなり、新型コロナが疑われ、PCR検査を受けることに。その時は大騒動。職場の上司に説明し早退。長女をすぐに保育園から連れ帰り、結果が出るまでの丸2日間、自宅待機。次女の容態が気になり、「私たちも陽性？ 誰かにうつしたかも？親だけ感染なら長女をどうする？」など不安と恐怖はMAX。

幸い、結果は陰性でしたが、その後は「ただの風邪でも次女は引けない！」と気が張る毎日です。いつまでもつか…。

YK ／東町

市民と農業者の支え合いが見えた

コロナ騒動で一番感じたことは「市民同士の支え合い」が、小金井に存在したことです。3月からの突然の臨時休校に伴う学校給食用野菜問題。意識ある方が速やかに各方面へ働きかけ、市民が野菜を無駄にすることなく買い支える。ほんとにありがたい助け合いの関係を強く感じた次第です。

そして、その後の品不足！農業者としての行動は、農協を通じて米を切らさないようにすること！端境期と重なる時期でしたが、新鮮野菜を供給し続けることでした。さらに、改めて国産の大切さを感じると共に、効率一辺倒の日本社会を根底から見直す必要性を強く感じた次第です。今後、コロナ騒動を検証し、安心して暮らせる社会へ繋がることを願うばかりです。

高橋金一／関野町

都市農業の大切さを改めて実感する。

道路よりも自然を残して

声高にSTAY HOME が呼びかけられた大型連休。空気は澄み新緑がきらめく最高の季節にどこへも出かけられないストレスを和らげてくれたのは、はけ（国分寺崖線）と野川の素晴らしい自然環境でした。このエリアの環境の良さをあらためて実感している住民は多いのではないでしょうか。

気がかりなのは野川に橋をかける都道計画のこと。市民の反対の声は市を通じて何度も都に届けられています。4年前の都知事選で予定地を視察すると約束したはずの小池都知事は当選後は一切関心がない様子だし、風に乗り当選した小金井選出の都議もまったくあてになりません（涙）。市民のみなさんがコロナをきっかけに、都政や自分たちが住む環境に関心をもってくれることを願っています。安田桂子／東町

野川には子どもも大人ものびのびしに来る。

小中学生の子とステイホーム

うちには中学生1人、小学生2人、子どもが3人います。休み期間中、それぞれ学校から課題がたくさん出ています。中学生と、小学校高学年の子は、なんとか自分でやってます。小学校低学年の子は、なかなか宿題やりません。そうだよね、無理だよね…と思いつつ、宿題するときは付き合っています。

休校中のお知らせメール（2/27の夕方の以降5/22まで）をカウントしてみました。

小:48通（全体26、学年通信11×2）
中:37通（全体23、学年向け14）
・登校日／小:3回、中:5回

学校からのメール、多くて大変だなと思いましたが、その度に先生方が話し合って決めたりしてるんですよね、感謝です。

5/22に小金井市の小中学校再開の見通しが発表されました。中学生は「順調にいけば…って話しでしょ」と、これまで登校日や予定が何度も中止になっているので、慎重な反応でした。

酒井美帆／本町

小金井市データ

緊急事態宣言
4/7 発出～ 5/25 解除　49日間
市立小中学校　3/2 ～臨時休校
5/25 ～準備登校、分散登校
6/15 ～一斉授業開始
新型コロナウイルス感染症の累計患者数
28 名（6/4 現在）
生活保護申請　2020 年 /3 ～5月
78 件（前年同期間比－1 件）
住居確保給付金　2020 年 /3 ～5月
149 件（前年同期間比 +147 件）